



酒器 07

輪島の風土で磨き上げられた 日本最高峰の伝統工芸

わじまぬり しっきこうぼう
輪島塗しおやす漆器工房
石川県輪島市



輪島塗しおやす漆器工房は、安政5(1858)年初代塩安忠左衛門が、輪島塗の塗師として独立した日よりはじまります。当初は、塗の仕事を請け負って下地職人として仕事をしていました。

商売を始めたのは三代目 塩安政之蒸で、時代は明治40(1907)年のことです。政之蒸は、当時北陸から、中国地方に鉄道がひかれることに着目し、鳥取県へ販路を拡大しました。鳥取では当時と変わらず「椀講」又は「輪島講」と呼ばれる方法で商売をしています。その時に使用する講帳と呼ばれる書面がありますが、現在も講主として塩安政之蒸の名が記されています。

昭和に入り戦争を経て日本が復興していく中、四代目塩安誠治が店舗を開設し、現在のし

おやす漆器工房の基礎ができました。

しおやす漆器工房は初代から受け継がれてきた技術と、それを受け継いできた先達の向上心と努力で、古き良き輪島塗と、新しい輪島塗の両方を今日も磨き上げています。

輪島塗は木地に下地を厚く施し、丈夫さと美しさを両立させた、輪島市で作られる漆器のこと。特に微生物の化石からなる珪藻土を水で練って素焼きし、細かく砕いたものを漆に混ぜて塗る下地が輪島塗の最大の特徴で、江戸時代享保期頃に技術が確立し、日本の伝統工芸となっています。全国の漆器産地の中で国指定重要無形文化財団体指定を受けているのは輪島塗だけです。

Experience program

オリジナルぐいのみ片口セット製作体験／オリジナル柄の「輪島塗ぐいのみ片口セット」正真正銘の輪島塗を扱う、他にはない体験ができます。

料金／30,000円/人 1～6名迄(ぐいのみ、片口代含む)

